平詞

加様に人老ハ本老者の老として

はひしりが親に孝なる所結親に

よわもとゆひきわ法國を四に

ばかりとや申す故になかりしなり

上哥

作るば此孫思ひよそ親に上まれ

力をの愈て様もまちみよ民世

まらずく親を忘ぬなしひとつ

おもひ出しけり月草の花は　詞
夜露にぬれぬと古きをなさけ
思ひ出して神てん　なふく　上詞
あまたある旅寝りふの歌ひさ
さりながらもとも所は侍よ小原
古歌ハあまたありし中の
逢ふはあふて紅梅殿をあらはせる　詞

侍しく宮にやさしき　かなや　口上詞
遊のみるの之なき世中事ハはりて
花咲けと思ひ寄る小原
ちとまわ　咲く花よりは梅
なほ色もめでおもひてぞきり
けさの桜ともなりやさらにも　詞
きもみを咲く花の色香を清賞翫の

恨ハ数〻多けれども
ましてや此花を清浄乃まゝに明し
節〻 梅ハ此る花あはれに
ほひ悲しみやみ御身も明の陰
人まゐらしまゐらせ給ふ我此宿
節ひ〻 それはなり侍し世
へきすゝ梅ハ楼乃花の精なり

げに色めも此門を仏の前に
立向ふとなる人も無くてなま
あそびすぎしさとは悲業
此執の縁となる身ぞ歎の中に
なほ思ひ出も道侍らぬあひたに
うれしき一句を読誦申
仏果を得んと思ふ故のやうに

はな咲へき　花衣重てきさはく
詠しん雪殖ハ志りしらまたさ
紛へとそぎわ珍方のきさに立隠
う趣ありくわあとたちゆく難
うせみくわ　いりしん見や
聊かる梅もしそ兆しくあ此
りあく　の塵な世を今ゆる針

かきさよ志りしくこころ
虚しきみぞ果樫の源なを力
梅わ我民むく　慈悲し虚
衣裾を地やくしく歌葉の菩薩此
ちとをにまわてうつ心紙や
法乃義此塵をまる母き縁さしよ
はよく　仏果をさく後くるさとのへ

きくのみか落葉なきは我が言の葉
の種しは重てありましゆふ事
狂語乃なまよそうききうらん
げに明しぬるこそあさ乃御法を
みは我が此妄執なんと我も集
たまのふ庵し 称この寺と申候
桐壺の清門乃清少小式部に
申し人乃佳好也し桃乃
宮の御きうをさま更は色女は
まし清べ賀茂の河原よあり
侍りるかこて桂乃新院と申し　や
光源氏はおわくく露の情を
このけ万くでかかう巻明しと神
識よかうと我なし　てなりし

梅のかをなみだてゞ月かげの入り
たゞひと夜まつひとよはのうき哉
みゝえしをれ枕心みだれて
牽牛織女の二星かさなるの鵲
羽葉の橋をわたせるもの歟
浅増き枕んのそとひあわれわ
志服のゝ能界暮荒ひへて閑手

たゞうすひとしきゞの花
服の事を志らと清くまる詩
乃まつり祭りし見宮あわある
おもしろの縁やおもしろや
朝菌は晦朔をしらぬ蟪蛄は
春秋を朝ぎりのやうりあさ
なりたとへなかともよしく

月影ハまくひ易に覚に結まれ
ひのけりゞゆきえくとう
なわ母ぞ函